

ホスト社会との相互作用を通じた移民によるエスニック・コミュニティの生成と変容  
—シドニーに定住するビルマ・カチン系移民の実践に焦点を当てて—

Transformation in how migrants create, construct, and utilize their ethnic community  
by interacting with host community-focusing on the practice of Burmese Kachin  
community both in Sydney and Tokyo

大学院人間文化創成科学研究科  
ジェンダー社会科学専攻 M2 内山 みどり

## 1. 要約

(和文)

本研究では、オーストラリア・シドニー近郊に定住するビルマ・カチン系コミュニティとそれを取りまく人々の実践の一端を聞き取りと参与観察により調査した。第三国定住プログラムによるマレーシア等からの流入により、信仰に基づく同胞コミュニティの内部にも構成員の渡豪背景に多様性がみられるようになった。それに伴い、同コミュニティの性質が変容し、信仰に基づく新たな同胞コミュニティが派生していったことも明らかになった。

カチン系のキリスト教徒であることを軸としつつも、様々な宗派や他の民族も受容してきたカチン系コミュニティおよびその成員の多くが運営に携わるカチン系政治・文化コミュニティの実践からは、シドニーの他ビルマ系団体や多国籍のキリスト教コミュニティとの交流に積極的な姿勢が垣間見えた。また、在豪カチン系移民 2 世の子どもたちを育てる親からは、子どもたちにとってのコミュニティの意義と同時に、家庭およびコミュニティが担う親の母語教育に対する課題もうかがえた。

今回は、東京での生活を経て日豪のカチン系コミュニティを経験した人々からコミュニティの活動や形態の特徴や相違点等に関して聞き取りを行うことで、その背景にある社会的環境が浮き彫りになった。

(英文)

In this research, I surveyed part of the practice of the Burmese Kachin community and people there who settled in Sydney, Australia by participant observation. As the influx from the country of first asylum such as Malaysia in the settlement program, the community saw the diversity in the background of their arrival inside the faith-based community of Kachin. Along with that, it became clear that the community inside was transformed, and a new one was derived based on faith.

In the practice of the faith-based Kachin community which has accepted other ethnics and different sects and the political and cultural-based community where a lot of

members of faith-based one are involved I saw a positive attitude towards interactions with other Burmese organizations and multicultural Christian communities. Also, parents who raise the second generation of Kachin in Australia mentioned the significance of the community for children, as well as parents' mother tongue education played by families and communities as issues they need to tackle.

In the interview, I heard about the characteristics and differences of Kachin community in both Tokyo and Sydney from those who used to live in Japan and the environment in each society behind them came to be clear.

## 2. 現地調査期間：2018年10月4日～10月18日

### 3. 調査背景

#### (1) 在豪ビルマ系移民について

オーストラリア政府の発表<sup>1</sup>によれば、在豪ビルマ人 (Myanmar-born people) は、2010年6月時点で29,300人である。2014年に人道的ビザ (humanitarian visa) が付与されたのは2,043人であり、同年の永住ビザ取得者の86.5%を占める。うち99%が「オフショア再定住 (offshore resettlement)<sup>2</sup>」での渡豪者である。

オーストラリア統計局による国勢調査<sup>3</sup>によれば、ニューサウスウェールズ州におけるビルマ系 (Burmese ancestry) の人口は2016年時点で6,618人、と2011年から36.4%の増加だった。人口の多い自治体は順に、Cumberland Council (780人)、City of Canterbury Bankstown (994人)、Blacktown City (928人) となっており、いずれもシドニー中心部から50km圏内に位置している。

#### (2) カチンについて

ミャンマー (ビルマ) は人口の7割近くを占めるバマーを筆頭に、人口の多い順にシャン、カレン (カイン)、アラカン (ラカイン)、モン、チン、カチン、カヤー (カレンニー) の7つの少数民族から構成される多民族国家であり、さらに135の部族に分かれるといわれている。カチンは、カチン州、シャン州北部、中国雲南省、インド・アッサム地方に居住し、6つの部族の共通言語はカチン語である。1880年代にアメリカの宣教師によってキリスト教のカチンへの伝道がはじまり、人々はアニミズム信仰から改宗していった。カチンのキリスト教信仰は土着化し、Kachin Baptist Convention (KBC) が担う中でエスノ・ナショナリズムとの結びつきが強化されていった (Sadan 2013)。

ビルマでは少数民族が自治と自決権を主張し、「真の連邦国家」成立を訴えてきたが、カチンもその1つであり、少数民族武装組織であるKachin Independent Army (KIA) は長年ビルマ政府軍と対峙してきた。1994年には前軍事政権とKIAとの間で停戦が交された

が、2011年に停戦が破棄され戦闘が再開されると、村の焼き打ちや無差別攻撃から逃れる国内避難民が大量に発生した。加え、ビルマ軍によるカチンの女性に対する暴行や一般市民の殺害事件もシャン州北部やカチン州では絶えない。

難民や移民として海外に移住するカチン系の定住国としては、イギリス、アメリカ、日本、マレーシア、インド、カナダ、デンマーク、ノルウェー、オランダ、スウェーデン、ドイツ、チェコ、ルーマニア、フィリピン、タイ、シンガポール、オーストラリア、ニュージーランドが挙げられる。

### (3) 調査の実施経緯について

調査者は、2017年12月10日から30日まで、グローバル協力センターから支援を得て、同地域のカチン系コミュニティにて参与観察と聞き取りを行った。そこでは、同胞コミュニティに民族アイデンティティの強化に意義を感じ積極的に関わる人、さらなる信仰の高まりからエスニック・アイデンティティが全面に出た同胞コミュニティに疑問を覚え距離を置く人、同胞の自助に重要性を感じつつも関わりに疲れを感じる人、他のコミュニティと行き来をする人、というようにカチン系コミュニティとの個々の関わり方に多様性がみられた。信仰心の高まり、吐露が語りにおいて垣間見られた。たとえば、UNHCRが手配した移住先がオーストラリアであったこと、言語の壁に苦しみながらも就職できたこと、渡豪間もない同胞者が在豪年数の長い自分を頼りに絶えず訪ねてくる中でも惜しめない協力ができたことなど、各々の転機や日常生活が「神のおかげである」あるいは「神の計らいである」という表現とともに語られたことがあった。

一方で、カチン系移民からは「団体や集会への帰属は自身の信仰にたいした問題ではない」という指摘もあり、信仰という個人の内面とホスト社会でのエスニック・コミュニティとの連関を見いだすには至らなかった。追跡調査として位置づけられる今回は、集会や組織とそれらに関わるカチン系移民の実践に焦点を当てることで、実践が信仰心に依拠するという点を踏まえつつも、背景にはホスト社会の環境的側面が実践といかに関係するかという視点で臨んだ。

## 4. 調査目的

本調査の目的は、オーストラリア・シドニーにおいて、ビルマ出身およびその子孫であるカチン系移民が築くエスニック・コミュニティの特質をホスト社会との関係性に焦点を当てながら、ミクロレベルで検討することである。調査者が関わってきた日本（東京）のカチン系コミュニティの中核者と周囲の人々のコミュニティ内外における実践との比較を視野に入れつつ、シドニーのカチン系コミュニティへの参与観察や聞き取りを通じて、エスニック・コミュニティの内と外を架橋する相互作用の可能性を探りたい。

## 5. 調査方法

2018年10月5日から18日まで、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州シドニーのインナーウェスト地域に位置するストラスフィールド市に暮らすビルマ系移民 ST 氏の家庭に滞在した。カレン系の夫を持つ ST 氏は調査者が東京で共に活動をしているカチン系コミュニティのキーパーソン (SB 氏) の夫の妹にあたる。2017年12月の渡航調査で接点のあった方に加え、彼らの知り合いを紹介してもらい、対象者の自宅や車中、教会 (AKBC-Sydney、AKCF-Sydney) など相手の生活や行動に支障が出ないよう心がけて聞き取りを行った。

表1 現地調査スケジュール

滞在		
期間	場所 (地域)	概要
5~17	ST 氏宅 (Strathfield)	ST 氏と彼女の夫へは食事時に聞き取り
訪問場所		
日付	場所 (地域)	概要
7	Church in Sydney (Blacktown)、 Baptist Community Church Burwood (Burwood)	ST 氏家族の通う Church in Sydney での礼拝にて参与観察と AKCF-Sydney の礼拝と食事会への参加と聞き取り
8	HK 氏宅 (Lidcombe)	HK 氏への聞き取りと、HK 氏家族との昼食
10	LL 氏姉宅 (Blacktown)	LL 氏姉の家で開催された AKCF-Sydney のメンバーでの夕食会および子どもたちとの交流
11	Settlement Services International (Parramatta)、LL 氏宅	LL 氏が勤務する組織 (Settlement Services International) の見学、LL 氏への聞き取り
12	TY 氏宅 (Auburn)	TY 氏宅での夕食、TY 氏と同氏宅に同居する女性 (父はモン系、母はカレン系) への聞き取り
14	AKBC-Sydney の集会所 (Regents Park)、Villawood Baptist Church (Villawood)、Baptist Community Church Burwood (Burwood)	DN 氏への聞き取り (車中)、AKBC-Sydney の集会所で開かれた女性対象の聖書勉強会での参与観察と昼食、AKBC-Sydney の礼拝への参加、AKCF-Sydney のサンデースクールと食事会への参加と聞き取り
15	MJ 氏宅 (Mount Druitt)	MJ 氏への聞き取りと MJ 氏家族との夕食
16	SY 氏宅 (Regents Park)	SY 氏への聞き取り

表2 聞き取り対象者の情報

仮名	年齢	性別	在豪年数	渡豪背景	要点
SY	74	男	8 (C)	活発な反政府運動に身の危険を感じ、子どもたちもいることから渡豪	シャン系の両親を持つ。カチン系の女性と結婚し、ビルマ・シャン州北部でカチンの子どもたちへの教育に携わる中で「人生をカチンの人々に捧げる」決心をしたという。
AM	不明	男	7 (C)	マレーシアで UNHCR に登録し、第三国定住で渡豪	1991年より11年間ほど日本に住み、飲食店で働いていた。SY氏の息子でLL氏の兄。妻はHN氏の妹。病院に勤務している。
HN	46	男	3	シンガポールで看護師として働いていたカチン系の女性と結婚し、日本より渡豪	観光ビザで2008年に入国し、難民申請後、定住者資格を得た。7年間ほど日本に住み、飲食店で働いた。日本ではKachin National Organization Japan (KNO-JAPAN) で政治活動に勤しみ、SB氏の活動にも協力的だった。
ST	53	女	22 (C)	就労目的でビルマより日本へ渡航途中、友人の勧めで中継地の豪州に留まることを急遽決意し渡豪	17年間、Burmese Christian Church-Sydneyに所属し、自宅を開放して信徒を集めた勉強会に献身した。信仰の高まりからビルマやカチンのコミュニティから離れ、別のキリスト教系教会に身を置くようになった。公立病院の手術室で医師のアシスタントとして働く。
TY	43	女	10 (C)	マレーシアで UNHCR に登録し、第三国定住で渡豪	マレーシアで知り合ったカレン系の夫と3人の娘、同国で知り合った独身女性(モン系とカレン系)とともに、カチン系のオーナーに借りた家に暮らす。工場で製造工程に携わる。
MJ	36	女	15 (C)	難民として受け入れられたニュージーランドより渡豪(ニュージーランドで citizenship を取得)	自身はカレン系で夫はカチン系である。10代半ばで一次庇護国のタイから姉とともにニュージーランドに第三国定住し、大学では看護を学んだ。現在は4児の子育てに専念する。家庭ではカチン語、ビルマ語、英語が話される。
DN	不明	女	7 (C)	ビザの関係で日本を離れたカチン系の夫を追い、娘とともに渡豪	渡豪当初、現在15歳の娘との会話は日本語とカチン語が中心だった。現在はAKBC-Sydneyに通う。ラウンドリーに従事している。

LL	40	女	11 (C)	日本で学士号・修士号を取得し、数年の就労を経て渡豪	現在、シドニーに住む姉とともに難民・移民の定住支援組織 Settlement Services International に勤務。オーストラリア発祥の Hillsong Church 附属の Collage で学び、歌手として活動していた。
----	----	---	--------	---------------------------	---

※表中の (C) は Citizenship (オーストラリア市民権＝国籍) 取得者を意味する。

## 6. 調査結果

### (1) 在シドニー・カチン系移民のコミュニティ

在豪カチン系コミュニティは、ニューサウスウェールズ州シドニー、ビクトリア州メルボルン、クイーンズランド州ブリスベンが代表的である。その規模は、シドニー周辺に約 300 人、メルボルン周辺に約 250 人と AM 氏はみる。また、SY 氏は、就業機会による居住地選択も指摘する。例えば、食肉処理業が盛んな都市のひとつ、ニューサウスウェールズ州ワガワガには、第三国定住でマレーシアなどから渡豪する難民が増加傾向<sup>4</sup>にある。食肉処理業の労働力を要する同都市では、職が保障されているということで、彼らは渡豪前からワガワガ行きを推奨されるという。また、シドニー等の大都市に居住するも就職の機会を得られず、仕事を求めてワガワガに移住するカチンの若者もいるという。

彼らが所属する主なキリスト教系教会（集会）は、Burmese Christian Church-Sydney (BCC-Sydney)、Australia Kachin Baptist Church (AKBC-Sydney)、Australia Kachin Christian Fellowship-Sydney (AKCF-Sydney)、カトリック系教会だ。1990 年に Burmese Christian Fellowship として発足し、1992 年に正式に設立された BCC-Sydney では、所有する礼拝堂で毎週日曜日 10:00 から 12:30 まで礼拝を行っている。AKCF-Sydney の礼拝は食事を囲んだ交流も含め 15:00 から 18:00 くらいまで開かれる。両方の礼拝に参加する AKCF-Sydney メンバーも少なくない。AKBC-Sydney では、ビルマから招へいた牧師の宿泊や集会に利用する教会所有の家屋にて、10:30 頃から女性たちの聖書勉強会が 15 人弱で開かれる。終了後は各家庭から持ち寄ったカチン料理で昼食をし、それぞれ車で礼拝を行う Villawood Baptist Church に移動する。礼拝時間は 13:30 頃から 15:00 過ぎで、その後食事となる。

### (2) AKCF-Sydney および KAA の実践にみるエスニック・コミュニティの意義

#### ① 家族の集いの場としての AKCF-Sydney

AKCF-Sydney は、インナーウェスト (Inner West) 地域の Burwood 市にある Baptist Community Church Burwood (以下、BCCB) で毎週日曜日 15 時から礼拝を行っている。当時 BCC-Sydney に通っていたカチン系移民の有志がカチン語で礼拝や親睦をする集いをもとめ発足した。礼拝には未就学児から中学生くらいの子どもを持つ家族が集う。MJ 氏はカチン語を理解できないが、それでも一緒に座って祈り、カチン語で賛美歌を歌う。オース

トラリアでは様々なエスニックグループと関わり合う中で異なる言語環境の中においても心地よささえ抱くようになったそうである。

カチン系の夫とともに AKCF-Sydney の設立にも関わっていた MJ 氏は、「家族同士で時間と場所を共有するコミュニティ」であると振り返る。日曜日の礼拝以外には、メンバーの誕生日やクリスマスのパーティー、聖書の学びの集い (Bible study)、カチンの政治的なミーティングをメンバーの家で開く。将来的に規模が拡大すればコミュニティ施設などを借りる必要があるが、現在は個人宅を持ち回りで使用するに十分な規模だという。

## ② AKCF-Sydney の変容

近年、AKCF-Sydney にはマレーシアからの移住者が目立つようになり、そのことがカチン系教会の分裂につながったと AM 氏はみる。1951 年の難民の地位に関する条約に加盟していないマレーシアでは、難民や庇護申請者は「不法入国者 (illegal or undocumented migrant)」とみなされる。そのため、彼らは正規の就労が許されず、安全の保障された生活を送ることが難しい。彼らは UNHCR に登録されると、第三国定住でアメリカやカナダ、オーストラリアなどに難民として受け入れられる機会を求める。マレーシアには、Kachin Refugee Committee (KRC) という自助組織があり、UNHCR や NGO との関わりがある。TY 氏によれば、第三国定住を求めるカチンの人々は KBC にルーツを持つ KRC を介して UNHCR にアクセスし登録を行うという。TY 氏自身はカトリックを信仰し、KRC には所属せず個人的に UNHCR にアクセスした。KRC を経由して渡豪した難民には KBC に結びつきのある人が多くなる傾向にある。したがって、クリスチャンとしての信仰を軸にしつつも様々な宗派を受け入れてきた AKCF-Sydney にも KBC 派の人が増えることで、KBC 派の主張も強くなり、分裂に至った。

AKCF-Sydney の分裂後、AKBC-Sydney が組織され 3 年ほどになり、AM 氏も KBC 派の人々とは接点がなくなってしまったと残念がる。当初は再統合も予期していたがその兆しもないようだ。宗派を超えた信仰グループを受容するグループ (Fellowship) からの KBC 派の分裂は、他国でも見られる。

## (3) 在東京カチン系コミュニティとの比較－東京での生活経験者より－

### ① カチン系コミュニティの支援を担う存在

AM 氏が来日した 1991 年当時は、1988 年に高まった民主化運動を受けて観光ビザ等で日本に渡った青年を中心に在日カチン系コミュニティが形成されつつある頃だった。東京・早稲田にある東京平和教会で牧師をしていた T 先生がカチン語での礼拝を望む青年たちを受け入れ、のちの Kachin Christian Peach Church の原型となる Kachin Christian Fellowship が組織された。当時はビザ失効後も日本にとどまり就労するカチンの青年が多く、オーバーステイゆえに国民健康保険が適用されない彼らの支援に T 先生は奔走してい

た。東京平和教会の牧師として T 先生のはたらきを知るカチン系移民は彼のカチン系コミュニティへの甚大な献身に言及する。AM 氏は、T 先生のようにカチン系コミュニティの外部から支援者としてカチン系移民に関わるような存在はシドニーでは思い当たらないと言う。人道的な受け入れで渡豪する人の多い在豪カチン系移民にはオーバーステイになる心配があまりないということも関係しているのではないかと見ている。同胞以外の支援者の存在としては、TY 氏は AKCF-Sydney の周辺では思い当たらないが、BCC-Sydney のビルマ系牧師の友人でオーストラリア系の弁護士が BCC-Sydney のビルマ系メンバーにビザ関係の手続きの支援をしているという言及があった。また、TY 氏を含め、第三国定住プログラムでの移住者は、難民として受け入れられた時点で永住資格を付与されるため、TY 氏はビザ関連の手続きで弁護士などに依頼する必要すらなかったそうである。

また、カチン系コミュニティ内外を架橋するコミュニティ内の中核的存在について、調査者がかかわりの深い在日カチン系女性 SB 氏の活動的な取り組みを紹介したうえで、シドニーでも彼女のような役割を担うカチン系の人物はいるかを問うた。日本で SB 氏と面識のある LL 氏と DN 氏は共通して「SB 氏のように自分たちの民族のために頑張る人はいない」と答えた。SB 氏は在日ビルマ少数民族の自助・文化交流団体として NPO 法人を創設し、団体では在日ビルマ人の成人を対象とした日本語教室（文化庁補助事業）とビルマにルーツを持つ子どもを対象としたビルマ語教室を運営している。2 世の子どもたちの教育に意欲を見せる LL 氏だが、意義を認めつつも、現状は難しいだろうと考える。SB 氏でさえ日本での活動をシドニーで同様にすることはできないだろうと言う。実際、移民の子どもの母語学習に自治体は協力的であり、教室開催のための場所を提供するなどの支援はあるという。また、難民・移民の定住支援機関で働く LL 氏も仕事で得たスキルや知見を活かし、自身の姪や甥も属する AKCF-Sydney に還元したい。しかし、家族での時間に比重を置く親たちは、ビルマ語教室をはじめ子どもたちのための取り組みに積極的ではないと考えている。また TY 氏は、SB 氏のように国政レベルの政治家に提言をしたり、協働したりする活動的な人物はカチン系コミュニティにはいないと感心する一方で、シドニーではカレン系コミュニティの方が規模も大きく、組織として発達しているのではないかと推測する。

## ② カチン系コミュニティをとりまく環境とその背景

DN 氏は、自身の高校生の娘を含め、日本で生まれ育ったカチン系の子どもたちへのカチン語の教育が手薄であり、その背景には親たちの不安定な在留資格があったのではないかと振り返る。1980 年代末から 1990 年代にかけて来日した仲間の多くがオーバーステイ状態であり、公然とコミュニティ活動ができなかった。当時、カチン語で不自由なくコミュニケーションをとれる娘と同世代の子どももいたため、カチン語使用の度合いは各家庭によるだろう。しかし、いずれにせよコミュニティとして 2 世の子どもたちへのカチン語教育に余裕がなかったとみている。



現在、DN 氏の娘は AKBC-Sydney に通い、Ramma（青年）グループに属している。東京では、Kachin Christian Peace Church（KCPC）にかかわりの深い親を持つ日本生まれのカチン系 2 世が多い。そのほとんどは、ビルマ生まれの 10~20 代で来日したカチン系の青年たちが中心を担う KCPC の Ramma グループには関わっていない。2018 年には、日本生まれのカチン系 2 世の子どもたちが中心となり、東京平和教会<sup>5</sup>の青年グループが組織されたが、その背景にはビルマ生まれの青年たちとの言語をはじめとする壁やカチン系 2 世としてのアイデンティティの事情があった、と呼びかけ人の女子大学生が語っていた。DN 氏は在日カチン系 2 世の子どもたちの状況をふまえた上で、AKBC-Sydney では日本生まれの娘を含めビルマ以外で生まれ育ったカチン系 2 世とビルマで生まれ育った青年との間では言語に起因するコミュニケーションの問題はないのでは起きにくいのではないかと指摘する。ビルマから来日した青年たちは日本語の習得に苦勞する一方、英語には親しみがある。そのため、英語でのコミュニケーションには不自由がないのだと DN 氏はいう。

職業選択に関しては両国間に違いがみられた。カチン系の友人の紹介で家具職人として働く HK 氏は、日本で暮らしていた当時、カチン系コミュニティには居酒屋や焼肉屋などの飲食店で働く仲間が多かったという。税金を抑えるため、ランチタイムとディナータイムで働く店を好む傾向にあった。HK 氏の他にも自身が日本で暮らしていた、あるいは日本で暮らす親戚を持つ人々からは「日本では飲食店で朝から夜まで働いている（らしい）」という声が共通していた。在豪カチン系移民の中では、病院、ランドリー、老人介護施設、郵便局での就業者が目立つという。病院では、看護や医療現場の補助、清掃などが挙げられる。特に公立病院の場合は州政府の公務員としてリストラや景気に関係なく働き続けられ、職種によっては高い英語レベルは求められない安定した職業として人気である。HK 氏や MJ 氏は、政府が家族で過ごす時間を大切にしよう推奨していると感じている。実際、未就学児を持つ夫婦がそれぞれ朝勤（morning ship）または夜勤（night ship）で働き、保育園に預ける代わりに家で夫と妻が交代で子どもの世話をしたり、夫婦ともに朝勤で働き、学校から帰宅した子どもと共に家族の時間を過ごしたりというスタイルがめずらしくないという。これも、終日労働に追われ、家族との時間を確保しがたい日本との違いだと HK 氏は言う。

### ③ コミュニティの凝集性

カチン系教会が分裂により多宗派を受容する教会（Fellowship）と KBC との 2 つに大別される特徴は、東京およびシドニーで共通している。しかし、東京では「民族最大の悲劇」とまで AM 氏が形容した分裂とその後の不仲を経て、現在は両者が歩み寄り、協働するまでに至ったことは HK 氏、AM 氏、SY 氏ともに評価している。KCPC と TKBC の双方が互いの催しに参加する。シドニーでは AKCF-Sydney と AKBC-Sydney が協働することはない。それでも、HK 氏は、それぞれの代表に協力の必要性を説いているという。

#### (4) 他コミュニティとの相互作用

##### ① ビルマ系コミュニティ

SY氏によれば、シドニーに拠点を置くビルマ系コミュニティの中でも Sydney Myanmar Community (以下、SMC) は規模が大きく、メンバーの渡豪背景は、就労や留学、家族呼び寄せなどが中心で、難民は少ないとみる。教会や寺院のような信仰を軸とする組織ではない。SMC が催すイベントでカチン系の出し物が求められる際は、必ず KAA に要請があるという。KAA の中核的存在は AKCF-Sydney に所属しているため、AKCF-Sydney のメンバーが SMC と協働するというのだ。SMC が AKBC-Sydney と接点を持つ機会が無いのは、AKBC-Sydney はビルマに本部のある KBC の管轄下にあり、KBC の司令のもと活動するからだ。そのため、AKBC-Sydney が他コミュニティとの協働することは難しくなる。

KAA は、カチン系以外の民族コミュニティとともに政治活動を行うこともある。キャンベラにあるビルマ大使館前では、軍事政権時代は民主化を訴え、現在は少数民族州での戦闘や情勢悪化などに対して抗議デモを行う。しかし、シドニー近郊とキャンベラとの間は車で3〜4時間ほどの距離であるため、デモに参加するには仕事を終日休む必要があることから、参加しづらくなる。それに比べ、東京・品川にあるビルマ大使館前でのデモには仕事を終日休まず参加することができる、と HK 氏は言う。

##### ② 信仰を軸とした多文化交流

AKCF-Sydney が礼拝に使用している BCCB では、“Family Fun Day” という催しを毎年行っている。2018 年は 10 月 27 日に開催されるということで、10 月 14 日の AKCF-Sydney の礼拝後には BCCB の牧師を交えて準備や広報に向けた打合せが行われた。

“Family Fun Day” には「みなが楽しめるように (教会のコミュニティを開放することで) 外のコミュニティとの交流をはかり、神様の福音を共有する (to reach out the community and share gospel so that everyone enjoy)」という目的があると LL 氏は言う。BCCB で礼拝を行っているグループがインドやネパール、韓国など各々の国の料理を提供するブースを設けたり、文化紹介のステージでダンスを披露したり、子どもたちが楽しめるようなフェイスペインティングやクラフト体験などを企画したりする。AKCF-Sydney は女性たちがカチンの伝統衣装を身にまといステージでダンスを披露し、「ビルマ」国旗を掲げたテーブルではビルマ料理を販売する。LL 氏によれば、クリスチャンのみならず Burwood 近隣の住民やイベントに興味を持った家族連れで賑わい、毎回 400〜500 人もが訪れるという。

#### (5) AKCF-Sydney にみるカチン系コミュニティとしての課題と展望

##### ① カチン系 2 世への親の母語継承の課題

SY 氏は、オーストラリアにおいてカチン系コミュニティは中東諸国やフィリピン、中国などに比べて規模は非常に小さいため、まずは次世代のためにコミュニティを維持させる

ことを目標にすると同時に、子どもたちへのカチン語教育にはすでに課題感を抱いている。過去に KAA の会議では子どもへのカチン語の教育の必要性が議論されたようだ。しかし、カチン語を教えられるだけの教養を備えた人は十分いても、教室を管理するとなると仕事の多忙さを理由に消極的になる。また、メンバーが「自動的に」結集するのは、祖国での情勢悪化や少数民族州での軍事衝突など緊急性の事件が起きたときくらいだ、と SY 氏は言う。そのような背景からも、カチン系の親を持ちオーストラリアで生まれ育った 2 世の子どもたちへのカチン語教育の担い手としては、KAA などの組織よりもむしろ各家庭が望ましいと考える。

実際に、オーストラリア政府や子どもたちの通う学校は、家庭で親の言語を子どもに継承することを推奨している。しかし、親子でカチン語でのコミュニケーションを積極的に行っている家庭は少なく、背景として親の渡豪経緯とそれに伴う教育事情が関係しているのではないかと SY 氏はみている。例えば、ビルマの辺境地出身者にみられるのが、地域での内戦状況から安全を求めて若くしてマレーシアやタイに渡ったために、本国ビルマでも一次庇護国であるマレーシアなどでも十分な教育を受けていないケースだ。英語の習得が不十分な彼らに対し、オーストラリア政府からは語学学校での英語学習の機会が提供されるが、通学での習得に苦勞する人も多い。一方で、言語習得の早い子どもたちは、現地の学校で教育を受ける中で親よりも早く英語を身につける。そこで、親は子どもから英語を学ぼうと、家庭では英語の使用を好む傾向が見られるという。それに対し、高度な教育経験を持ち、国際的感覚を養った親たちは、渡豪後数年で英語を不自由なく話せるようになる。したがって、子どもたちから英語を学ぼうとするモチベーションは起きにくく、家庭ではカチン語でのコミュニケーションを図ろうと努めるのではないかとみている。各家庭の言語に対する価値観も反映されるため、親の教育事情との連関は一概には言えない。しかし、マレーシアやタイ、インド等などの一次庇護国より人道的理由で受け入れられたカチン系の人々が多いオーストラリアで見られる特徴のひとつだ、と SY 氏は考える。

2 世への言語継承の課題に直面しつつも、SY 氏は自身の家族がそのモデルとして果たす役割は大きいのではないかと感じている。自身の妻、そして息子夫婦と 3 人の孫と同居する SY 氏は、孫たちとはカチン語でのコミュニケーションを実践しており、孫たちは母親と毎晩カチン語で書かれた聖書を学ぶことを習慣としている。機会があれば自宅やメンバーの家で週に 2 時間程度カチン語の教室を開くことが望ましい。

## ② AKCF・Sydney に期待される役割

カチン語での礼拝と交わりを望む有志で設立した AKCF・Sydney ではあったが、実際はカチン系以外の民族的背景を持つメンバーも目立つ。夫婦のいずれかがカレン系、夫婦どちらもカチン系以外の民族という家族もいる。信仰宗派もカトリック、カチン・バプテスト、バプテスト、セブンスデー・アドベンチストなど多様である。AKCF・Sydney のコミュニテ

ィ内に多様性が育まれている現状を LL 氏は歓迎している。当初、カチン系の礼拝に施設を貸し出してほしいという要望に対し、BCCB の牧師はカチン系に限定することを好意的に受け止めなかったそうである。それを受け、カチン系以外でも参加しやすい開かれた雰囲気 LL 氏は大切にしているという。礼拝は基本的にカチン語で進行され、賛美歌や聖書の斉唱もカチン語版を使用しているが、証しやメッセージは参加者の顔ぶれをみてビルマ語で行われることもある。今後、参加者にさらに多様化がみられる場合は、ビルマ語や英語での礼拝も検討したいと LL 氏は言う。

他のコミュニティとの文化交流に積極的な姿勢を見せる LL 氏は、カチン系のコミュニティでは、民族のダンスや歌唱の披露がコミュニティの内輪で行われている現状を憂いている。それは閉鎖的であり、興じる大人たちを前に次世代の子どもたちはついていけない。例えば、毎年恒例の“Family Fun Day”をはじめ、外部に開かれた場にこそ文化を披露する機会を求めるべきだという。一方で、カチン系コミュニティではとかく決め事が円滑に進まず、他コミュニティとの協働に及び腰な人もいる。オーストラリアに拠点を置く世界的なキリスト教系組織でライブイベントやチームの運営を学んだ LL 氏は、そこで培ったスキルを AKCF-Sydney の活動に活かすよう努めている。

カレン系の MJ 氏は、カチン系の夫との間に生まれた 4 人の子どもたちを AKCF-Sydney に通わせている。MJ 氏は、AKCF-Sydney が子どもたちにとって「人として互いを愛し合いながら育ち、文化を学ぶコミュニティ」である、とその価値を強調していた。そして、幼少期からカチンにつながりのある子どもたちが共に過ごす時間を持たなければ、カチン系であることを知らずに育ってしまう。早期から親密な関係を育むことで、成長したら一緒にコミュニティを運営することができる、と期待する。

## 7. 考察

調査者の在日カチン系コミュニティとの関係性が調査協力者とのやりとり及び彼らから得た情報や知見に反映されたと考える。調査者は、在日カチン系コミュニティの形成初期から常にコミュニティの中核者として活動を続けてきた SB 氏と関わり続けて 4 年近くなる。SB 氏は、カチン系コミュニティにとどまらず、在日ビルマ少数民族の自助を目的とした NPO 法人を設立し、各国からの難民と支援団体との連携組織、区の多文化共生政策に取り組む委員会や政府の第三国定住政策のアドバイザーなど幅広く活躍している。活動は日本国内にとどまらず、海外在住のカチン系コミュニティのネットワーキングや本国の国内避難民への支援にも熱心だ。日豪両国での生活を経験したカチン系移民も日本で生活していた際に活動を共にするなど彼女との接点があった。

このように、シドニーでのカチン系移民と調査者との関係性の根底に、両者が共有する SB 氏および彼女を取り巻く活動にまつわる知見や情報があったことは、対象者が日本での暮らしを経験していたか否かにかかわらず、聞き取りに効果的に働いた。日本での生活を経験

していないカチン系移民に対しては、SB 氏の活動や在日カチン系コミュニティの特徴にごく簡単に触れつつ、「そのような～はこちらにはあるか？」というようなやりとりを試みた。一方で、日本を経験したカチン系移民とは、現在の SB 氏の活動やコミュニティの状況、共通の友人について話を進めながら、両国を比較するような会話が展開された。

さらに、Facebook という SNS ツールが他国のカチン系コミュニティの情報源になっていることがみられた。例えば、彼らの中には、KCPC での毎週の礼拝から、分裂した 2 つのカチン系教会を含めカチン系の文化および政治諸団体の代表が初めて一堂に会し、協働の意思を確かめ合ったという出来事に至るまで、Facebook への投稿で情報を逐一得ている人もいた。Facebook を含む SNS などのオンライン上で共有された情報が、聞き取り対象者と調査者を媒介し、聞き取り調査においてそれぞれの認識をすりあわせる働きも持ちうることも指摘できる。

今回、AKCF-Sydney やその周囲の人々への聞き取りからは、コミュニティ生成当初は目立たなかったオーストラリア政府による第三国定住プログラムでの難民の流入がコミュニティの変容の要因のひとつとして浮かび上がった。地方への定住傾向があるとのことだが、同胞者の集住都市であるシドニーへのさらなる移住によりカチン系コミュニティにあらたな変容が起る可能性もあるといえよう。

## 8. 今後の研究への展望

今回は、2017 年 12 月に行った 1 回目の調査では検討に至らなかったホスト社会との相互作用の一端に触れることができたが、日本（東京）で活躍するカチン系コミュニティのキーパーソンに相当する存在との接触はなかった。社会保障や定住国の言語の習得、就労機会、在日カチン系 2 世の高等教育へのアクセスの難しさから東京では自助を目的としたエスニック・コミュニティの存在意義が強調されることがある。一方で、シドニーでは上記の機会へのアクセスが困難であるという語りはみられなかった。生活におけるニーズがエスニック・コミュニティの成熟に反映される可能性は検討の余地があるだろう。

## 注

1. <https://www.homeaffairs.gov.au/about/reports-publications/research-statistics/statistics/live-in-australia/country-profiles/myanmar> (2018 年 11 月 8 日最終閲覧)
2. 「オフショア再定住 (offshore resettlement)」とは、すでにオーストラリアにおり庇護を求める人々に対して国連の定めた難民の定義に基づいて適切な判断を下す「オンショア保護 (onshore protection/asylum)」とは別に、「再定住を選択するにふさわしい人々に対しオーストラリア政府が実施している難民保護の取り組み」である。「オフショア再定住 (offshore resettlement)」には、「難民 (refugee)」と「特別人道プログラム Special

Humanitarian Program (SHP)」のカテゴリーが該当する。

<https://www.homeaffairs.gov.au/about/corporate/information/fact-sheets/60refugee>

(2018年11月8日最終閲覧)

3. <http://multiculturalnsw.id.com.au/multiculturalnsw/ancestry-introduction?COIID=238>

(最終閲覧 2018年11月8日)

4. ニューサウスウェールズ州では移民のほとんどがシドニーに居住する傾向がある一方で、地方には特に人道移民 (humanitarian migrant) の集中する地域もあり、ワガワガ・シティとコフスハーバー・シティもその中で挙げられている。各都市におけるビルマ系の人口は、それぞれ 142 人、181 人となっている。(参考 : <https://blog.id.com.au/2011/population/demographic-trends/immigration-nsw/> 最終閲覧 2018年11月8日)

5. 日本バプテスト同盟の東京平和教会は、母語であるカチン語で礼拝を行いたいというカチン系の青年たちを 1992 年に受け入れた。Kachin Christian Fellowship として参加者も増加して Kachin Christian Peace Church となり、2014 年には日本バプテスト同盟の教会として正式に設立された。現在は、午前中の東京平和教会の礼拝後に同じ礼拝堂で KCPC が礼拝を行う。

#### 参考文献

Sadan Mandy (2013) , *Being and Becoming Kachin Histories beyond the State in the Borderworlds of Burma*, London: Oxford University Press.